

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372800807		
法人名	社会福祉法人 蘇南会		
事業所名	グループホームすみれ		
所在地	熊本県上益城郡山都町北中島2679-3		
自己評価作成日	平成30年10月19日	評価結果市町村受理日	平成30年12月4日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	平成30年11月1日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ハード面では十分でないところもあるが、周囲の自然環境は豊かで日常的に散歩などが出来、季節を肌で感じることができる。
また、職員は全員が資格取得しており、認知症介護の重要性を理解してケアに努めている。家族も協力的で面会や季節の野菜や果物などの差し入れ等、日常的な交流がある。
住宅地に立地していない為、地域との日常的な交流が難しい面はあるが、運営推進委員を含む地域の方々の高齢者や認知症に対する関心は高く、グループホームに対しても大変協力的である。
また、山都福祉村内に、保健・医療・福祉の複合型施設があり、さまざまな連携があることは、利用者や家族にとっても安心できる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

福祉村の一角に既存の建物を活用して開設したホームは、入居者が季節を感じ、日常の散歩や散策を楽しみながら、可能な限り本人の希望や自己決定できる働きかけにより、活気ある生活を送られている。地域との日常的な交流は困難な面もあるが、法人への信頼や地域の方々の理解と協力に感謝しながら、職員も自身の持つ資格や特技を発揮しながら日々のケアに邁進している。今年度より取り組んでいる「ランチの旅」と命名された外食支援は、毎回職員が行く先の情報を収集し、笑顔を引き出す外出となっている。調理で使用した鍋やざるなど日光干しされる入居者の姿や「楽しくするとが一番ですもん!」「お帰りも気を付けて!」など、来訪者にも気づかいの一言を下さる入居者の言葉には重みがあり、人生の先輩であることを痛感する。これからも入居者の経験と職員の持ち味を発揮するホームとして、新たな年月を重ねていかれることを期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所内の掲示板等、目につきやすい場所に啓示し、目を通して日々の業務に従事している。	開所時から長年目標としてきた理念であり、職員の中にはしっかり浸透している。しかしながら本年度は、職員移動により数名の入れ替わりがあったことから、管理者は入職した職員にホームの現状を伝えながら、理念についても話をしている。今回理念の振り返りの場として、自己評価を活用している。	理念については立ち止まる時間を持つことが必要と思われる。具体的に文言をかみ砕いて、内容を掘り下げながら評価することで、職員への浸透が見えてくると思われる。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	立地的に日常的な交流は難しいが、お達者会や地域の行事に参加し、地域の方との交流を図っている。	民家から距離を置くホームではあるが、日々流れてくる防災無線からの地域情報が入居者の話題となったり、敷地内に点在する法人施設との交流も継続されている。また、食材納入に訪れる業者や、運営推進会議に参加する地域の代表者も馴染みの関係である。社協主催の“おたっしゃ会”で同じ地域の方と再会し、人々と交流する機会を持っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議等を通して、委員や地域の方へ認知症への理解や見守り支援等について伝えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議には地域の民生委員や区長、駐在所等の参加があり、会議で出た意見は運営に取り入れ、サービス向上に活かしている。	2ヶ月ごとの定期開催が実現しており、行政や社協の担当者、地元駐在所や地区の代表者が参加している。リビングを会場としており、入居者もその場に同席して毎回、会議の様子を体験している。駐在所の方の「施設の防犯について」のミニ講座をホームの現状に照らしたり、義務付けとなった身体拘束や虐待への取り組みを発信している。	会議冒頭には入居者が自ら自己紹介をされるなど、入居者参加型のアットホームな会議となっている。地域代表者との貴重な会議であり、内容は参加される家族ばかりでなく、他の家族への報告が必要と思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	毎月の地域ケア会議での連携や、日頃から連絡を取り合い信頼関係を築いている。地区外のサロン等へも積極的に参加し、行政と協力している。	行政担当者の運営推進会議への参加により、ホームの現状をありのまま報告し、運営の透明性を図っている。管理者はホームの課題や相談事に応じてもらいながら、入居者や職員が安心して過ごせるホーム作りを進めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束については、職員全員に基本的理解はある。身体拘束廃止の指針を作成している。夜間帯、代替手段が無くやむを得ない身体拘束にあたる行為は実施している。(家族への説明・同意書、記録あり。)	運営推進会議を活用し、身体拘束に対するホームの基本姿勢を示し、センサーマットの使用などについても、参加者に報告している。職員は普段からテレビニュースなどの実例を通し、自身に置き換えながら、拘束や虐待にいたった経緯を検討している。本年度は外部研修でもこの問題が主として取り上げられ、参加した職員は内容を正確に伝達するよう努めている。	何か心配事があれば、個人やホームが抱え込まないように管理者は法人や行政と連携し、対応するように努めており、今後も集団生活の永遠の課題として、拘束ゼロへの取り組みを継続して頂きたい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員研修等で勉強会を実施し、日々の身体の傷や内出血についても原因を追求し、認知症ゆえに虐待が見過ごされることがない様になっている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員研修等で勉強会を実施しているが、活用能力は十分ではない。継続的に学ぶ機会が必要。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居の際、御家族には重要事項説明書に沿って十分説明し、納得の上で同意を得ている。改定の際も同様に十分説明し同意を得ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱の設置や家族会、日頃の面会の際など要望や意見を聞き、職員に共有し運営に反映させている。 法人設置の第三者委員会(苦情解決委員会)での協議を運営に活かしている。	職員は家族の面会時や家族会で、遠慮なく意見を出してもらう様投げかけている。特に苦情についてはなかなか上がらないのが現状のようであり、何もなければいいのではなく、家族の立場で考え、思いを押し量るように心がけている。入居者の要望は日々の会話から汲み取り、ケアに反映するようにしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の職員会議の際、職員全員が遠慮なく自分の意見が言えるようにしている。また、個々に意見を聞く様にしている。	毎月の職員会議はケア会議を兼ねており、内容がどうしてもケア中心の話になりがちとのことである。業務改善に向けた意見等ホーム運営に関わる職員の思いを引き出したいとしており、会議内容や時間配分が課題と思われる。法人全体で資格取得の後押しをしており、グループホーム連絡協議会の活動を通じ、他事業所との関係を図っている。	本年度は職員との個人面談が出来ていないとのことであり、実現に期待したい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職場環境等は、職員会議で意見を聞く等、改善が出来る所は直ぐに対応している。楽しく働きやすい職場環境を作る努力をしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	個々に応じた研修の機会を配慮している。業務関係の資格取得には、特休もあり、資格取得しやすい環境がある。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	上益城部会やその他研修会に出席し同業者との交流する機会を作っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人と個別に話をする時間を設け、アセスメントをするなかで、本人の思いや希望を受けとめるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	御家族とよく話し合い、思いを受けとめ不安を取り除きながら、事業者や職員との信頼関係を築いている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と御家族が今求めていることを見極め何が必要なのか、話し合いを行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	御家族からの情報や、世間話や昔の思い出話などを聞き、日常生活の中でそれを活かし、共に教えたり教えられたりの関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	お便りや日々の電話連絡・定期報告、面会時に様子を伝えたり、誕生会や家族会等、一緒に過ごす機会を設けている。また、面会時等、本人の代弁者としても御家族に思いを伝え、共に支える関係を作っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	行きつけの美容院に行かれる方もあり、馴染みの関係が途切れないようにしている。法事や冠婚葬祭での外出などは、積極的に勧めている。	地域の防災無線からの情報で、入居者は出身地の地名や懐かしい行事の話に思いをはせている。法人主催のどんどこやに参加したり、秋の稲刈りを見学するなど馴染みの生活に触れる環境にある。家族の協力による日帰りの帰宅や散髪への外出、中には家族自ら入居者の髪をカットされたり、使い慣れた化粧品を購入して面会に来られることもある。ホームではできる限り、入居者の趣味や特技が活かせる場面を提供しており、編み物や調理、食器の天日干しをされる方など日常の中で支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係性や個性を理解し、さりげなく仲介に入るなど、利用者同士の関わりの支援をして、和やかに笑い合える雰囲気作りを心がけている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居されて病院や他事業所におられても、時々面会に行き、関係性を断ち切らない様にしている。退居後も来館される御家族もあり、相談を聞いたりしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常的に本人と話す機会を作る様にして希望や意向の把握に努めている。把握が難しい場合も、思いを汲み取る様にしている。	職員は一日の中に入居者とゆっくり関わる時間を設けており、会話の中から思いを引き出したり、何気ない一言に気を留めながら意向を確認している。殆どの方が自らの言葉で暮らし方への希望を発言されているが、表現が困難になられた方には、職員が話しかけながら表情を確認して思いをくみ取っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や御家族・面会の方々等から情報を得たりして、職員で共有把握している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者と過ごす中、観察や会話に努め、気付いた事などは職員間で共有するようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や御家族の要望をできる限り聞き、職員間でも話し合い本人に合った介護計画を作成している	職員は入居時のアセスメントで、入居者のこれまでの生き方をしっかりと把握するよう心掛けている。料理店のオーナーであった入居者が、汁物を作る際、器に先ず具材を入れる様子なども、その方の生き方の一面として大事にしており、本人・家族の思いと共に、担当職員の意見を尊重したプランを掲げている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の変化や気づき等は個別記録に記入している。出勤時の申し送りや、連絡ノートを活用して職員間で情報の共有を図っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	他科受診など必要に応じて御家族と連絡を密にしている。また、タイムリーな地域の催し等への参加など、心がけている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の行事やお達者会に参加し、地域の方との交流や力を発揮する場が持てる様に配慮している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本的に本人や御家族の希望の病院へ受診する。協力病院では、緊急受診や健康診断の支援をしている。かかりつけ医とは、必要に応じて連携を取っている。また、訪問歯科診療がある。	本人・家族の希望するかかりつけ医を支援している。協力医療機関による送迎受診や他の医療機関については家族による対応としているが、緊急時はホームでも柔軟に支援している。受診の結果などは専用の連絡ノートを作り、職員間で共有を図っている。口腔ケアについては、毎食後の歯磨きを支援しており、必要に応じて訪問歯科診療が行われている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	気付いた情報は看護職に報告・相談し、不在時も常時連絡できる体制がある。また協力病院や特養看護師とも日常的に連携・支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	福祉村内に協力病院がある為、日常的に連携しており、入院時も安心して治療が出来る。外来・病棟にも馴染みの職員がいて支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	事前指定書を作成し関係者で方針を共有している。地域での支援までは出来ていない。	入居時に事前指定書をもとに説明を行い、理解を得ている。また、医療行為がなければギリギリまでホームで対応しており、主治医や法人看護師なども日頃から連携を図り、ホームに出来得る最良の支援に努めている。	入居者は慣れ親しんだ自然豊かな環境のホームで、生き生きと生活されている。「元気だときにはビールもうまいですよ！」など、日常を語られる表情から職員の関わりを窺える。変わらぬ支援で入居者の日々を支えていただきたい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアルに沿ってその都度確認はしているが、定期的な訓練までは出来ていない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の火災訓練の他、災害に対する勉強会を実施している。防災頭巾の準備はある。地域との災害時の体制は十分ではない。	火災を想定した自主訓練と消防署や防災業者の参加協力を得た総合訓練を実施している。また、災害に対する勉強会を実施し、手作りの防災頭巾は明るい布で作成されており、食堂内で管理している。地域との協力体制は課題としており、今後消防団に訓練の参加を依頼していきたいとしている。備蓄については法人と3日分をホームで確保している。	備蓄については、今後はさらに必要な品などリストを作り準備されることを期待したい。また、作成後は運営推進会議の中でも報告いただきたい。火災は火を出さない事が一番であり、毎日行っている火元チェックも表を作り実施することで、職員の意識付けに繋がると思われる。避難訓練には消防団員の参加を得て実施してみたいとしており、実現が期待される。訓練以外でもまずは、団員にホーム内の状況を見てもらうことも有効と思われる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	基本は理解しているが、時に本人にとっては好ましくない言葉を使っていることもある。	管理者は入居者にとって馴染みである方言の使用は否定しないが、声のトーンなどに配慮し失礼のないように努めることを指導している。呼称は基本的に苗字にさん付けとしているが、同姓の場合は下の名など状況に応じて検討している。個人情報の使用については、家族への説明と同意を得ており、職員の守秘義務については、周知徹底を図っている。個々の希望も大切に特に外出の際は、おしゃれや身だしなみに配慮している。また、就寝時は毎回パジャマに着替えてもらうようにしている。	管理者が語るように方言の使い次第では、失礼になることも想定される。今後は入居者とのコミュニケーションが馴れ合いになっていないかなど、気になる支援や配慮が必要な支援内容など、定期的に自己評価する仕組みを作ることも有効かと思われる。取り組みに期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者自身が選択したり、可能な限り本人の希望や自己決定ができるよう働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	今日は何をしたいか等、話しかけながら、楽しく過ごせるように配慮しているが、難しい面もある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	できるだけ本人のできることは本人の自由にしてもらい、できない所へ支援している。外出や行事時などのおしゃれにも気を付けている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は利用者の希望に沿い柔軟にメニュー変更するなど、気分に沿う様にしている。準備等も一緒にしている。また、外食(ランチ)を楽しんでいる。	母体施設から届く食材を基に調理する日もあるが、週3回は、ホーム独自献立を立て、季節感のある料理を提供している。誕生会では入居者の希望メニューを取り入れており、入居者の楽しみ事となっている。おやつ作りや配膳、下膳など入居者の出来る事で食への関わりを支援しており、昼食は職員も一緒に会話をしながら摂っている。また、その日の調理担当者が同じものを摂り、思いを共有している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	糖尿病の方への対応や夜間の水分補給など、一人一人の習慣に応じて対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケア(歯磨きなど)を実施。自力でできる方には声掛けをして、介助の必要性に応じて対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々に応じて必要な方には排泄チェック表を付けながら排泄パターンの把握に努めている。それぞれの能力に合わせた支援をし、安易にオムツをしない様になっている。	基本的に布パンツの使用し、必要に応じて紙パンツや尿取りを併用する等個々に応じて支援している。夜間のみテープ式おむつやポータブルトイレを使用されており、ポータブルトイレの衛生管理は、洗浄や消毒を実施し気持ちよく使用できるようにしている。職員は安易にオムツに頼らない排泄支援や個々の排泄状況について共有を図り、適切な対応ができるようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	体操や散歩などで身体を動かしたり、適度な水分摂取を促してはいるが、水分を摂れない方もおられ、個別に対応している。必要に応じて下剤服用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	時間的に午後からの入浴である。自分で入浴できる方は自分で入ってもらっている。マンツーマン対応でゆっくりと入浴してもらっている。	入浴は午後を中心に週2～3回支援している。殆どが見守りや介助が必要であり、マンツーマンで会話をしながらゆっくり対応している。自分で入浴できる方には、特に事前の湯温などに配慮している。浴室は清潔に管理し、気持ちよく入浴できるように努め、シャンプーなどは個人で好みのものを準備されている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中、居眠りしている方や疲労感のある方には声掛けして休んでもらったりしている。寝巻に着替えたり、就寝前にゆっくりくつろげる様に心がけている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	誤薬がない様に、職員2名で確認し服薬介助している。処方の変更時は、受診連絡ノートに記入し全職員確認するようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	掃除・洗濯干しやたたみ、畑仕事や料理や外出など、個々に応じた役割や力を発揮できる場への支援をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出など個々に行きたい所などを聞き、なるべく希望を叶えるようにしている。天気の良い日は希望に応じて急に出掛けることもある。	個々の外出への希望は可能な限り対応に努めており、散歩をはじめ大型ショッピングセンターで買い物を楽しんだ後の外食やカラオケ店の利用など、聞き取りや記録写真からも確認された。役場にも入居者がホームの一員として同行するなど工夫が窺える。今年度から企画したランチの旅は、職員が行先の情報を収集し4～5人で出かけており、好評である。家族の協力により、盆・正月をはじめとした帰省も支援されている。	広大な法人の敷地では、季節ごとに樹木や草花の開花、紅葉が楽しめ、入居者も天候の良い日は散歩が日課になっている。また、スタートしたランチの旅など職員のアイデアが入居者の外出の幅を広げている。継続した取り組みに期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者や御家族の希望に応じて預り金管理している。外出時など、自ら支払いをしてもらう方もある。少額自己管理されている方もある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	自ら電話を掛ける方はいないが、希望されたり、家族からの電話に出てもらったりしている。年賀状を書く等の支援はしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	温度・湿度管理やさりげなく花を飾るなど居心地よく過ごせるようにしている。リビング兼食堂が狭いが、日常的に食事の準備を見て匂いを感じることができる。	玄関先のプランターをはじめ、ホーム内には至る所に敷地内に咲いたものや、職員が持ち寄った季節の草花が飾られ居心地の良さに繋がっている。また、職員の特技を活かした壁面や外出・イベント時の写真の掲示は、来訪者も楽しみにされている。リビング食堂は決して広くはないが、逆に家庭の台所にいる雰囲気であり、昼食時に聞こえる防災無線も入居者にとっての馴染みが、安心感を与えている。	掲示されている写真については、日付を記入することで、来訪者にもより分かりやすくなると思われる。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者はソファやテーブル席をうまく利用して過ごされている。居室へ行ったり玄関や2階の椅子でも過ごせるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使い慣れた物を配置し、利用者の状態や好みにより配置も工夫している。	ゆとりの広さの居室はどの部屋も眺めがよく、使い慣れた寝具や化粧品、家族が持参される新聞などをはじめ、居心地よく過ごせる環境が作られている。中にはジュータンが敷かれた部屋もあり、足を伸ばして寛ぐことができる。家族の写真があると安心される方もあるが、ない方が落ち着かれる場合など、入居後も家族と相談しながら環境の整備に努めている。衣替えは家族と担当職員が中心に行い、不足の品があればその都度連絡を行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	廊下など、利用者が歩く動線上には、物を置かない様にしている。出来る人や分かる人は自由にリビング内の物を出し入れしてもらおう等、個々にあった支援をしている。		